



生物多様性の保全に向けて



JAL グループは、生物多様性に関する活動に積極的に取り組んでいます。環境月間にあたり、今回はこの領域で国内外の活動を牽引し、『JAL タンチョウフォトコンテスト』の審査員を含め、JAL グループの活動にもご協力をいただいているアーティストの MISIA さんと国連大学の武内和彦教授に、昨今の日本における生物多様性保全の状況や、世界農業遺産も含めた里山・里海保全などの取り組みについて、お話を伺いました。

文／富山閣子 写真／奥宮誠次



編集部▼おふたりは、生物多様性について、最近ではどういった活動をされていますか。

MISIAさん（以下MI）▼私は、生物多様性について伝える活動が中心です。2010年に名古屋で開催されたCOP10で**愛知目標**（※1）が決まりましたが、「生物多様性」について、また「その重要性」については、まだまだ認識率は上がっていないのが現状だと思います。ではそのことをどうやって分かりやすく伝えれば良いのか、最初は悩みました。しかし頭であれこれ考えるよりも、まずは実際に森に接してみること、命とは？自然とは？ということとをみんなに感じてもらうのではないかと『**MISIAの森**』（※2）プロジェクトをスタートさせました。金沢の『MISIAの森』では、小学生たちが森を訪れ、子どもの視点からとても面白いレポートを出してくれていて、SATOYAMA BASKETというサイトで紹介しています。毎回楽しみに読んでいますが、たとえば、「同じ緑でも濃い緑、薄い緑があるんだね」とか「冬の森はとても静かだけど、実はいろいろな生物がそこにいるんだね」など、子どもの素直な視点にとっても感動します。やはり、森の中で実際に生物多様性を感じてくれているということが実感できました。これからも、続けていきたいですね。武内先生も世界農業遺産という形で人と自然とのかかわりの重要性について提言されていますよね。



武内教授（以下教授）▼世界農業遺産とは食料の安定確保を目指す国連食糧農業機関（FAO）が、古くからある里山での暮らしのように多種多様な生物と人々がいかに共存して暮らしているかを考える

生きるとは、こういうことなんですよ。

教授▼それは素晴らしいですね。人の生活は生き物によって支えられています。生き物を大切にしながらは自分たちの生活もおかしくなってしまう。経済的豊かさも大事ですが、自然のなかで生きていて得られる満足感や生きがい、生物多様性がもたらす豊かさや幸福なのです。そういう意味で私たちが目指しているのが、自然の仕組みを活かして「よりよく生きる」ということ。これが世界で取り組んで

いる『SATOYAMA イニシアティブ』（※3）の究極の目標です。日本で古くから受け継がれてきた里山に見られた、自然とともに人間が生きているという概念です。

編集部▼それでは、これから人と自然のかかわりは、どうあるべきでしょうか。

教授▼今、シカやイノシシなどの一部の野生動物の個体数が急激に増えたり、外来種の生息域が拡大して、日本の自然が脅かされています。こうした事態を改善するためには、むしろ人による適正な管理が必要になるのです。たとえば、奄美大島では島外から持ち込まれたマングースが増え、クロウサギの生存在が厳しい状態です。でも、こうした外来種を少しずつ退治していく取り組みのおかげで、徐々にクロウサギが増えてきたんですよ。つまり、やればそれだけの効果があるということなのです。

MI▼スキューバダイビングで慶良間諸島に行ったとき、珊瑚の数が減っているのに驚きました。ダイバーの人たちが一生懸命オニヒトデの駆除を行っています。数が少なくなったと嘆くだけでなく、すぐに行動を起こさなくては間に合わないんですね。

教授▼実はタンチョウも地元の人が中心になって、もっと広い範囲で生息できるように取り組んでいるんです。現在、冬にはタンチョウの約9割が釧路周辺の湿地に生息しているのですが、感染症などが発生したらたちまち絶滅状態になってしまいます。タンチョウを絶滅させないためには、生息環境の回復を進め、広い範囲で生活してもらったほうがいいわけです。昔は東京（江戸）にも鶴がいたわけですから、いずれ人と鶴が共存する関係にしたいですね。これも生物多様性といえるのです。

MI▼今回のJALタンチョウフォトコンテスト

ことを目標として開始したプロジェクトです。近代化のなかで失われつつあるその土地の環境を生かした伝統的な農業や農法、そして生物多様性が守られた土地の利用や農村文化を次世代に継承していくことを目指しています。

日本では『能登の里山里海』『トキと共生する佐渡の里山』『阿蘇の草原の維持と持続的農業』などが認定されています。たとえば、能登では農家民宿を営んでいる人たちが子どもたちを呼んで稲刈りや田植えを経験させ、そこで収穫したお米を学校の給食でみんなに食べてもらうなど、実体験から自然と人のかかわりの大切さを学んでもらう取り組みを地域ぐるみで行っています。また、阿蘇では何百年にもわたり、人々が野焼きをすることによって赤牛の餌となる美しい草原を維持しています。野焼きをやめると木が生い茂り草原はなくなってしまうのです。

このように生態系と人間の営みが農業を通じて繋がっていることを次世代に伝えていくのが世界農業遺産です。今の子どもは自然と触れ合う機会が少ないため、自然が遠い存在になっているのが問題です。ですから、まず自然のなかでさまざまな体験をしてもらうことが大事なのです。

MI▼体験することで気づくことがあるということですね。今は見ようとしなければ見えないこと、気づくことしなければ気づけないことがたくさんあるから、知るきっかけはたくさんあったほうがいいですね。私は、2年前からキャンドルの灯りの中で歌を歌う『Candle Night Live』を行っています。これは、一時文明から離れて、人として生きる幸せを見つめ直そうという意味を込めたライブです。実際に森の中で歌を歌うと鳥がさえずり、虫が鳴き出すんですよ。生き物たちも森で歌っているんだな、人と一緒に歌を楽しんでいるのだな、と実感できる最高のひとときです。人と生き物が一緒に

でたくさんさんの写真を見ましたが、飛来している鶴の写真があれば、カップルで寄り添ったり、親子の鶴の写真だったり。同じ鶴でも見る人によってこんなに感動する部分が違うんだなあ、と思いました。それも多様性のひとつかな。このフォトコンテストが、こういうことに気づききっかけにもなると思います。これからも多くの人に現地へ足を運んで鶴を撮影していただき、写真を通じて生物多様性の大切さを社会に伝えていただけたらうれしいですね。

用語メモ

愛知目標（※1）

COP10の成果のひとつで、2050年までに「自然と共生する世界」を実現するために、2020年までに達成すべき20の個別目標を掲げた。

MISIAの森（※2）

小さい頃から自然と暮らしてきたMISIAさんが森の魅力を伝えていくプロジェクト。石川県森林公園内の『MISIAの森』で、森の保全活動や普及啓発を行っている。

SATOYAMA イニシアティブ（※3）

国連大学サステイナビリティ高等研究所と環境省によって推進されている国際的な取り組み。里山のような二次的自然が、よりよく生きているという人の福利（幸せや利益）と生物多様性の両方を高める可能性があることに着目し、自然とともに人間が生きているという関係の再構築を目指している。

プロフィール

武内和彦

1951年和歌山県生まれ。国連大学 上級副学長。東京大学サステイナビリティ学連携研究機構長、中央環境審議会会長などを兼任。SATOYAMA イニシアティブなどを通じて、持続可能な自然共生社会の実現に向けたビジョンを提言している。近著に『世界農業遺産』『日本の自然環境政策』など。

MISIA

7月7日長崎県生まれ。日本を代表する女性歌手。音楽活動の傍ら、一般財団法人mudemfを通じてアフリカの子どもたちの支援や石川県に『MISIAの森』を保有し森林保全に取り組むなど、国内外に向けた生物多様性の普及啓発に取り組む。2010年にはCOP10名誉大使に任命された。現在3年ぶりのニューアルバム『NEW MORNING』が発売中。



『第2回 JAL タンチョウフォトコンテスト』 入賞の10作品が決定しました



多くの方々に、生物多様性を守っていくことの大切さを知っていただく機会に繋がると、今回の対談でも話題にのぼったのが JAL タンチョウフォトコンテスト。2 回目となる今回のコンテストには、最終的に 625 作品のご応募をいただきました。それらの作品を、武内教授、MISIA さんを含めた7名の審査員が厳正に審査。その結果、MISIA 賞をはじめとする各賞の入賞10作品が選出されました。ここで、その一部をご紹介します。



MISIA 賞 「ダンス」(撮影者／由井 猛 さん)

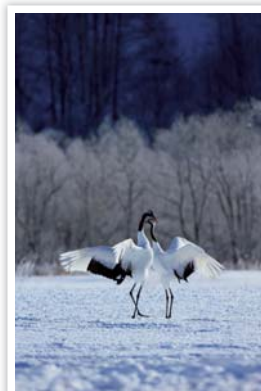
この写真を撮られた由井さんも、きっと心はともに踊っていらっしやったのでしょうね。生物多様性が保全され、いつまでも、この美しいダンスが見られる世界でありますように。(選評／ MISIA さん)



**釧路市長賞
「純白と紺碧」**
(撮影者／大杉 芳郎 さん)



**日本野鳥の会賞
「朝の陽光に舞う」**
(撮影者／永井 正 さん)



**鶴居村長賞
「タンチョウの舞台」**
(撮影者／清水 善之 さん)

第2回 JAL タンチョウフォトコンテスト 入賞作品

賞名	作品タイトル	撮影者
MISIA 賞	ダンス	由井 猛 さん
釧路市長賞	純白と紺碧	大杉 芳郎 さん
鶴居村長賞	タンチョウの舞台	清水 善之 さん
NPO 法人美しい村・鶴居村観光協会賞	ジャンプ	米塚 孝治 さん
日本野鳥の会賞	朝の陽光に舞う	永井 正 さん
ニコンイメージングジャパン賞	寄り添う	五東 建夫 さん
JAL 賞	雪に舞う	前田 賢一 さん
ビックカメラ賞	夕翔	住友 肇 さん
ビックカメラ賞	家族だよ～	中野渡 正樹 さん
ビックカメラ賞	なかよし no.2	川島 保子 さん

※全入賞作品を以下のウェブサイトでもご覧いただけます。

www.jal.com/ja/tancho/

私たち JAL グループは、引き続き、
生物多様性保全の活動に取り組みます

JAL グループでは CSR 活動の 4 つの柱のひとつとして「環境」への取り組みを大切に考えています。そのなかで生物多様性の啓発活動の一環として、今回ご紹介した第2回 JAL タンチョウフォトコンテストを開催しました。

今後、コンテスト入賞作品を JAL グループのポスターや機内搭載絵ハガキとして活用したり、釧路空港で作品展を開催する(今夏を予定)など、幅広い活動を通じて、日本の美しく多様な自然を守り、未来に繋げていきたいという思いを、多くの方々と共有していきたいと思っています。